

氏名(本籍)	鷺津浩子(東京都)		
学位の種類	文学博士		
学位記番号	博乙第527号		
学位授与年月日	平成元年7月31日		
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当		
審査研究科	文芸言語研究科		
学位論文題目	Volume of Blank Pages : A Study of Nathaniel Hawthorne 〔空白のページの書—ナサニエル・ホーソンの研究〕		
主査	筑波大学教授	岩元	巖
副査	筑波大学教授	森田	孟
副査	筑波大学教授	利沢	幸雄
副査	筑波大学教授	赤祖父	哲二
副査	筑波大学教授	川口	喬一

論 文 の 要 旨

本論文は、19世紀アメリカの代表的な小説家ナサニエル・ホーソン（1804—1864）の長編小説、短編小説を題材とし、その言語、構成、ジャンルなどのいわゆる小説作法の技術的側面から論じた、非常に新鮮なものである。

全体の構成を著者は四部に分け、第Ⅰ部においては、小説は誰が作り、誰の権威が働いているかという“Authorship”の問題から一つの短編集と一つの作品を論じている。第Ⅱ部において、創作はたしてどのようにして生れ、かつまた何を目標として創作されているかという問題“Creation”を中心の論点として、二つの長編小説を扱っている。第Ⅲ部において、著者は小説作法上、「作者」はたしてどこまで信頼できるか、つまり、「作者」の権威はいかに働きうるかという問題、“Authority/Authorship”の関係を一つの長編と一つの短編を題材として論じている。第Ⅳ部において、事実としての“Original”な題材としていたものが小説作法においてはいかに消され、あるいはまたいかに小説という芸術作品に昇華されていくかという問題を中心にすえ、一つの長編小説と一つの短編小説を論ずる。このような構成によって、従来ある意味ではナイーブな道徳的、かつ清教徒的作家であったと認識されてきたナサニエル・ホーソンが実際には、現代のいわゆるポストモダニストと呼ばれている意識的、技巧的作家たちに匹敵する小説作法上の技巧家であり、その主題も表面的な道徳性より以上に複雑な人間心理の重層性を隠しもっていた作家という側面を証明しようとしている。

まず第1章では、『旧い牧師館の苔』Mosses from an Old Manse という初期短編集を取りあげ、この短編集が単なる短編小説の集まりではなく、その配列、構成の中にホーソンの隠された意図がある

ことを指摘する。即ち、序文にあたる「旧い牧師館」と結論にあたる「好事家の収集品」は物語作法でいうところの「枠組の物語」「A Frame Tale」となっていて、二番目の短編と最後から二番目の短編、「あざ」と「美の芸術家」が対応した物語となり、そして真中「羽飾り」という作品がおかれていることを指摘する。しかも、これらがすべて形式と主題の面で共通性を持ち、芸術家が創作する時に題材としての“Matter”と創作の精神“Spirit”をいかに融合させるかを問題としている。これまで、民謡やエッセイ風の短編を集めたものと考えられていた短編集をこのように読むことによって、ホーソンが初期時代から、芸術としての小説のありかたに腐心し、また題材をいかに芸術たらしめる虚構化というものに関心を抱いていたかが証明されている。

第2章では、「ラパチーニ娘」“Rappaccini's Daughter”という短編を取りあげ、ここでは単純に見える物語が、厳密に読むことによって物語の多重化という工夫がなされていて、物語を読む場合、その多重性を意識しなければならぬことを指摘する。表面的には、この物語は16世紀のイタリアで科学者ラパチーニ博士が美しき娘を人工的に作ったという話だが、それが19世紀の架空のフランスの作家ド・ロベピーヌによって語られ、さらにその話をアメリカの翻訳者が訳し、そしてそれをもとに作者としてのホーソンが小説に仕立てたという、この手順に著者は注目する。そしてこのような架空の手順をした作者は、この物語に“Authorship”の四重性を与えているのだとする。それはまたこの一見単純な物語を読む読み方、つまり“Readership”の問題を複雑化しようとした作者の意図でもある、と指摘している。この“Authorship”と“Readership”の問題は、この第Ⅰ部では著者によって提起されるが、本論文に一貫して説かれる問題となっている。

第Ⅱ部の第3章では、ホーソンの代表作『緋文字』*The Scarlet Letter*を取りあげ、ホーソンが作法の中心として自ら標榜していた「ロマンス」という点で、この作品がいかにロマンスそのものであるかを証明している。この章は本論文の中核をなすものだが、『緋文字』論として第一級の論文である。著者は作品の最後にホーソンが記した女主人公ヘスターの墓に彫られた墓碑名「黒地に輝く赤いAの文字」に着目し、それが罪の象徴として存在した緋文字の最終的なテキスト化だと説く。序文の「税関」で初めて発見される赤い布切れが『緋文字』というロマンス作品へ生育する過程が作品そのものだと論述する。著者の論述によって、本文『緋文字』につけられている非常に長い作者自身の序文「税関」の意義も明らかになり、また作品中の主題である姦通の結果の「受胎」、そしてその結果としての罪の子と言われたパールなどの存在がすべて作者“Author”と発想“Conception”，そして作品化“Textualization”という図式に見事に当てはまることになる。

第四章はもう一つのホーソンの代表的ロマンスである『七破風の家』*The House of Seven Gables*を題材にし、これを従来のような「呪い」の物語というより、作者自身が七つの破風のある家を想像し、それを作品として具現化していく物語だと説いている。つまり、当時のホーソンはイギリス流の小説“Novel”という現実密着型の作風に反発していて、虚構性の強いロマンスという形式を愛していたが、この作品は彼の小説作法そのものの具現化である、と著者は主張する。それは、『七破風の家』を解体的に読むことによって、物語全体が屋敷の解体と再建の物語として読むことができ、この解体と再建にかかわる現実（小説の様式）と虚構（ロマンスの様式）の関係はこの屋敷にかかわった

ピンチオン家とモール家との関係におきかえられて、作者に語られている。

第Ⅲ部、第5章で著者はすでに述べてきた“Authorship”というものの性格をさらにここで問い直そうとする。たとえば『ブライズデイル・ロマンス』*The Blithedale Romance* という事実をもとにして書かれたとされている作品について、著者はこのロマンスの語り手となる主人公カヴァーデイルの信頼性に疑問を提出すると共に、その信頼性のなさにこそこの作品を読む鍵があるとする。著者は、本来、この作品は語り手カヴァーデイルが共同村のブライズデイルについて書くはずの詩となるべきものであったのに、それが書かれずに散文によって代えられたことに着目する。したがって、出来あがった作品の中にカヴァーデイルの意図した詩が内在しているので、内在するテキストと結果として生まれたテキストとの間をたえず語り手は揺れ動くために、語り手としての信頼性を欠いてくると主張している。

これは、語り手の信頼性を否定することによって、語られる内容への信頼性を疑う読み方であるが、このような読み方によって、語り手によって語られる主人公たち、ホリングワース、ゼノビア、ブリシアなどの性格、人間関係について読者はより複雑な読みを要請されることになる。この方法、つまり“Authorship”への疑問はまた“Readership”への疑問となるわけで、著者が第6章で論ずる「僕の親戚、モリヌー少佐」“My Kinsman, Major Molineux”の解釈も大きく変わってくる。従来は、アメリカ植民地時代の権威の象徴としてのモリヌー少佐がリンチにかけられて、権威失墜、アメリカ民衆の勝利と解釈されていた作品だが、著者は作品を詳細に読むことによって、「モリヌー少佐」ははたしてこの作品に登場しているのかという疑問から論を始める。ここでも作者であるホーソンは少年主人公ロビンの発した言葉「僕の親戚、モリヌー少佐」だけを与えて、それ以外は何一つ少佐の実在を示す言葉を与えていないことを、著者は指摘する。これは認識の問題で、ロビンがモリヌー少佐を認識したかどうかとも問題となっている。このような指摘は、読むことという作業がいかに複雑になりうるかを示すものである。今日では、創作の仕方“Authorship”と同時に読み方“Readership”にも複雑な認識の変化がかかわかることを著者は示したと言える。

第Ⅳ部では、著者は創作行為とはその根元となっていた事実、人物、体験を“Original”と考え、と同時に“Original”の言葉の意味に存在する独創性もまた消し去っていく過程ではないかと推論する。これはすでに述べてきたホーソンの作法上の虚構化、テキスト化と呼応するもので、「ウエイクフィールド」という短編を例として、“Original”からの逸脱が小説芸術を生むと説いている。以上のようにして、著者の四部から成る論によって、技巧家として、またいわゆる小説芸術に対して非常に意識的(“Conscious”)作家としてのホーソン像をここに展開したことになる。

審 査 の 要 旨

本論文は従来のホーソン研究とは違い、新しく近年興隆してきた文学理論——物語論、解体批評、読者論——をよく踏まえて、構造と技法の面から19世紀の代表的ロマンス作家ナサニエル・ホーソンの像をとらえようとしたもので、非常に新鮮な力作だと考える。英文の論述も見事であり、す

に出版予定もあるが、出版の時は、アメリカにおいても十分に評価されるものと思われる。

もしも更に欲を言うとするれば、それではこのような技法の説明から、どのようにして従来の主題解釈への新しい光りを投げられるかを著者は考えていかざるをえない、また考えて欲しいと願う。やはり、文学研究は技法の解明と主題の解釈は車の両輪として存在するからである。しかし、この論文が現在のホーソン研究に新しい石を投じたことは疑いがない。きわめて重要な位置をこの分野において占めるだろう。

よって著者は文学博士の学位を受けるに十分な四角を有するものと認める。